

『資本論』第1巻第5篇のタイトル変更と経済学批判

齊藤 彰 一)¹⁾

はじめに

本稿の目的はカール・マルクスの『資本論』第1巻・第5篇のタイトル変更の原因を探求することである。

現行版『資本論』の第1部・第5篇は、「絶対的および相対的剰余価値の生産」となっている。ところがこの第5篇のタイトルは、ドイツ語初版(1867年)、ドイツ語第2版(1872年)、フランス語版(1872-75年)にかけて変更されてきたものである。なぜ変更が行われたのだろうか。それは現行版第5篇(初版ドイツ語版では第5章)に至るまでの内容変更といかに関連するのか。それを究明するというのが本稿の課題である。

第1章 問題の所在

資本主義的生産様式における資本の目的は剰余価値の取得である。それは自己増殖を目的とするがゆえに、二つの方法で剰余価値の生産を行う。第一にそれは労働日の延長による絶対的剰余価値の生産である。第二に、労働力の価値を低下させることによる相対的剰余価値の生産である。第一の絶対的剰余価値の生産は、『資本論』第1部第3編において説明され、第二の相対的剰余価値の生産は第4編で説明が行われる。それでは現行版第5篇「絶対的および相対的剰余価値の生産」では何が論じられるのだろうか。

この第5篇の内容を統一的に説明しようとする試みは古くから存在した。たとえばローゼンベルグは次のように述べている。

前二篇の諸結果を考察すること、絶対的剰余価値および相対的剰余価値の生産としての資本制生産を統一的に把握すること、また剰余価値のこの双方の形態に同じ程度に関連した諸問題をも研究すること、—これらすべてが本篇の内容を構成する。この篇は『絶対的剰余価値の生産』と『相対的剰余価値の生産』との篇を総合し補足する²⁾

つまり第3編と第4篇との「総合」と「補足」だということである。この観点の問題点は、第5篇には独自の内容が存在しないと述べているに等しいということである。しかしマルクスがこうした読者の復習のために一篇という形式を与えるだろうか。もし必要であるならば、第3

1) 岩手大学人文社会科学部准教授

2) ローゼンベルグ [1962], p.408.

編と第4篇の脚注部分にそれを記せばよいことである。だから、第5篇という形式は独自の内容を含んでいると考えなくてはならないのである³⁾。

ではその独自の内容はどのようにすれば解明されるのだろうか。その導きの糸となるのが、『資本論』各版における第5篇のタイトルの変更の考察である。初版からフランス語版に至るまで、第5篇のタイトルとその内包する諸章は次のように変更されている。

《ドイツ語初版》(1867年)

第5章 絶対的および相対的剰余価値の生産にかんする追加的研究

第1節 絶対的および相対的剰余価値

第2節 労働力の価格と剰余価値との量的変動

第3節 剰余価値率の種々の定式

第4節 労賃という形態に転化した労働力の価値または価格

《ドイツ語第二版》(1872年)

第5篇 絶対的および相対的剰余価値の生産

第14章 絶対的および相対的剰余価値

第15章 労働力の価格と剰余価値との量的変動

第16章 剰余価値率の種々の定式

第6編 労賃

《フランス語版》(1872-75年)

第5篇 剰余価値の生産にかんする追加的研究

第16章 絶対的剰余価値と相対的剰余価値

第17章 剰余価値と労働力の価値との間の量的変動

第18章 剰余価値率の種々の相違

第6編 労賃

これら諸版のタイトルの変更は次のような特徴をもっている。

第一に、初版から第二版にかけて労賃論が独立し、第6編となっている⁴⁾。

第二に、初版の第5章のタイトルにあった「さらに進んだ研究 *Weitere Untersuchungen*」という一句がフランス語版において「追加的研究 *Recherches ulterieurs*」というふうに復活しているということである⁵⁾。

3) 現行版『資本論』を第5篇の内容を全体として解明しようとする試みはあるが、疑問とするとところが多い。たとえば大谷 [2001] は第5篇の内容が「疎外」を中心とするものであるという。たしかに第14章は労働の生産力が資本の生産力に転化するという。つまり疎外である。しかしその分析は第15章および第16章の内容を包含するものとは言えない。また宇野 [1952] は第5篇の内容を「資本家と労働者との基本的関係」と規定する。しかしこの規定は第15章の内容でこそあれ、第5篇全体のそれとは言えない。

4) 労賃論が第二版で第6編として独立した理由は、労賃論の内部に新しい内容が付け加えられたからである。詳細は拙稿『マルクス剰余価値論の地層』p.183ff.

5) ドイツ語版の「さらに進んだ研究 *weitere Untersuchungen*」とフランス語版の「追加的な研究 *Recherches ulterieurs*」は同じものだと言おう。

ではなぜ初版からフランス語版までのタイトル変更を問題にするのか。なぜ現行版でないのか。それは、『資本論』第1巻の最終決定版に関する問題と関連している。大村 [1998] によれば、マルクスは『資本論』のアメリカ版を編集するさいに、「アメリカ版への編集指図書」を作成していた。その指図書は、ドイツ語第二版とフランス語版の叙述とを組み合わせる新しい版本を作るという目的をもったものだった。しかしエンゲルスはその編集指図書に従わず、マルクスの遺志とは異なったドイツ語第3版を編集・作成してしまったのである。エンゲルスがドイツ語第3版の編集にあたって、編集指図書を参照せず、マルクスの自用本であったドイツ語第二版とフランス語版に書き留めてあったメモだけを参照したと推定している。いずれにせよ、エンゲルスはマルクスの意志とは異なったやり方でドイツ語第3版を編集した。したがって現行の『資本論』第1巻は、マルクス本来の意志に沿ったものではない。

しかし、本稿で研究対象とする『資本論』第1巻第5篇に限って言えば、その大部分はフランス語版によって置き換えられるべしと「アメリカ版への編集指図書」では記載されている。したがって、概して言えば、フランス語版こそが最終決定版にもっとも近い版であると言える。我々がフランス語版へのタイトル変更を研究対象とするのは、そのフランス語版のタイトルがマルクスの遺志を忠実に反映したものであるからにはほかならない。

このタイトル変更の件について従来研究がなかったわけではない。大村 [1999] はこのタイトルの変更の原因として第6章の第4節として存在していた労賃論が第5章（第5篇）から独立したためだと考えている。労賃論ではその内容として古典派経済学つまりリカードウ学派の批判がなされている。労賃論が独立したことによって、その経済学批判の内容も一緒に第5章（第5篇）から失われた。そのことによって「さらに進んだ研究」という章句がなくなったというのである。つまり「さらに進んだ研究」という一句は、経済学批判なのであって、それが第5章から離れたことにともなって、「さらに進んだ研究」が削除されたというのである。本稿ではこの結論に対して大きな異議を唱えるものではない。また大村は、フランス語版で「さらに進んだ研究」という章句が第5篇のタイトルに追加された理由は、第16章（現行版では第14章）でリカードウおよびリカードウ学派、ひいてはJSミルにたいする批判の内容が付け加わったとする。本稿ではこの結論に大きな異議を唱えるものではない。

ではこの大村の結論のどこに問題があるのか。大村は「さらに進んだ研究」という章句が第二版でなくなったのは経済学批判の内容が第5篇からなくなったためであり、フランス語版からその章句が復活したのは経済学批判の内容が第16章で付け加えられたためだという。

しかし初版の「さらに進んだ研究」という一句がなくなってそしてフランス語版で復活したのであれば、それら経済学批判の内容が同一でなければならないだろう。たしかに双方とも主としてリカードウおよびリカードウ学派にたいする批判である。しかし内容は異なっている。そうであるとすれば、経済学批判の同一の内容ではなく、その批判の方法が同一であると考えすることはできないであろうか。本稿ではそこに注目したい。ではその批判の方法とは何であろうか。結論を先取りして言えば、それは、間違った問いに執着したあまり、真の科学的な問いにたどり着きえなかったという指摘である。本稿では、この問いの方法という観点から、第5篇のタイトルの変更について考えてゆく。

第2章 初版から「さらに進んだ研究」という章句が取り除かれた理由

第1節 『資本論』における経済学批判の方法

では初版の第5章のタイトル「絶対的および相対的剰余価値の生産にかんする追加的研究」から「追加的研究」という一句が外れた理由は何だろうか。それはドイツ語第2版において労賃論が「第6編」として独立したことにかかわりがある。この労賃論には古典派経済学にたいして独特ともいえる方法をもった批判が行われているのである。長くなるがその部分を現行版『資本論』から引用する。

古典派経済学は、日常生活から無批判に「労働の価格」というカテゴリーを借用し、そのあとで、この価格がどのように規定されるか？と自問した。まもなく古典派経済学は、次のことを一すなわち、需要供給の関係における変動は、他のあらゆる商品の価格についてと同じように労働の価格についても、価格の変動、すなわちある一定の大きさの上下への市場価格の動揺のほかには、なにも説明しないということを認識した。需要と供給が一致すれば、その他の諸事情が不変ならば、価格の動揺はやむ。しかしそのときには、需要供給もまた、なんらかの説明であることをやめる。需要と供給が一致するとき、労働の価格は、需要供給の関係とは独立に規定される労働の価格、すなわち労働の自然価格であり、こうしてこの価格が、実際に分析されるべき対象であることが見いだされた。あるいは、たとえば一年といふかなり長期の市場価格の諸動揺を取り上げてみると、その騰落が相殺されて、ある中位の平均的大きさ、ある不変の大きさになることが見いだされた。この平均的大きさは、もちろん、互いに相殺されるそれ自身からの諸背離とは違った仕方では規定されなくてはならなかった。労働の偶然的市場価格を支配し規制するこの価格、すなわち労働の「必要価格」（重農主義者）または「自然価格」（アダム・スミス）は、他の諸商品の場合と同じように、貨幣で表現された労働の価値でしかありえない。このようなやり方で、経済学は、労働の偶然的諸価格を通して労働の価値に迫っていくと考えた。次に、この労働の価値は、他の諸商品の場合と同じように、さらに生産費によって規定された。しかし、生産費—労働者の生産費、すなわち労働者そのものを生産あるいは再生産する費用とはなにか？経済学にあっては、本来の問題が無意識にこの問題にすり替えられた。というのは、経済学は、労働そのものの生産費でどうどうめぐりをして、少しも進まなかったからである。したがって、経済学が労働の価値と名づけるものは、実際には労働力の価値であり、この労働力は、労働者の人身のうちに実存するのであって、それがその機能である労働とは別のものであることは、機械がその作動とは別のものであるのと同じである。労働の市場価格と労働のいわゆる価値との区別、この価値と利潤率との、また労働によって生産される商品価値などとの関係に没頭したので、分析の進行が、労働の市場価格から労働のいわゆる価値に行きついただけでなく、この労働の価値そのものをまたもや労働力の価値に分解するところまで、すでに行きつたことには誰も一度も気がつかなかった⁶⁾

見られるように、古典派経済学は「労働の価格」という言葉を日常生活から無批判に取り出して、そこから「労働の価値」というものを抽出しようとした。やがて、労働の生産費と何

6) MEGA II / 5.S.435-436.

か、あるいは労働者そのものを生産あるいは再生産する生産費とは何か、という問いまで到達した。ここで経済学は実質的に「労働力の価値」という科学的な概念にたどりついたはずであった。しかし、経済学は自分たちが実質的に労働力の価値にたどりついたことに気づかず、労働の価値と利潤率、あるいは労働の価値と商品価値といった別の問いに逃避してしまった。そして我々の知るように、「労働の価値」は独り歩きして、それが俗流経済学の作戦基地となったのである。

ここでは古典派経済学が「労働の価値・価格とは何か」といった誤った問いへの執着⁷⁾から抜け出せず、労働力の価値とは何か、といった科学的な問いと解答に到達しえなかった事情が叙述されている。

非科学的な問いへの執着が科学的な問いへの道を閉ざすということ、このことが述べられているのが労賃論なのである。

ドイツ語第二版では、この労賃論が独立して、第6編「労賃」となり、第5章（第5篇）からこの独自の経済学批判の方法にかんする叙述は失われた。そのために、初版タイトルの「さらに進んだ研究」は取り除かれたと考えられる。初版第5章から労賃論が独立して、のち第6編となったことが第5章（のち第5篇）のタイトル変更の原因となった。しかし細にみれば、労賃論が独立したためというより、労賃論のなかに含まれていた誤った問いへの執着を軸とした古典派経済学の迷走の部分が分離されたために第5章（のち第5篇）のタイトル変更が生じたのだといえよう。

第2節 フランス語版で「さらに進んだ研究」が追加された理由

フランス語版の第17章で追加された文章は、一般に「ミルに関する覚書」と言われている。これは1873年12月5日付マルクス宛エンゲルス書簡でエンゲルスが最初にそう名付けたものである。一般にこの部分はミルに対する批判が主な内容であり、メガ編集部もそれに従っている⁸⁾。

だがこれは間違っている。この覚書を全体として読めば、主に批判されているのはリカードウもしくはリカードウ学派であって、ミルへの批判はつけたしであることがわかる。長くなるが引用する。

リカードウは剰余価値の源泉には無関心である。彼は、剰余価値を、彼から見れば社会的生産の自然的な形態である資本主義的生産様式に内在する一つのことからのように、取り扱っている。労働の生産性について語る場合、彼は、そこに剰余価値の定在の原因を求めめるのではなく、ただ、剰余価値の大きさを規定する原因を求めているにすぎない。これに対して彼の学派は、労働の生産力を利潤（剰余価値と読め）の発生原因として声高く宣言した。《中略》とはいえ、リカードウ学派も、この問題を回避しただけであって、解決しはしなかつ

7) 労賃論のこの部分はアルチュセールが「問いの構造」を説明するために引用した部分でもある。つまり「労働の価格とは何か」という問題にかかずらって、そこから一歩も出ることができずたどしい問いに到達しえなかったということである。本稿では「労働の価格とは何か」という問いの「構造」と呼ばず、「労働の価格とは何か」という問いへの「執着」と表現する。この「執着」という態度だけでも、古典派経済学の迷走は表現できるからである。

8) メガ編集部は、この覚書が追加されたのは、当時ミルの学説が欧州を席卷していたためだと推定している。つまりミルにたいする対抗心からマルクスがこの部分でミル批判を展開したというのである。この点は齊藤[2021]を参照のこと。

た。実際、これらのブルジョア経済学者たちは、剰余価値の源泉にかんする焦眉の問題をあまり深く究明することは非常に危険である、という正しい本能をもっていた。しかし、リカードウより半世紀のちに、ジョン・スチュアート・ミル氏が、リカードウを最初に浅薄化した連中の愚にもつかない逃げ口上をへたに繰り返すことによって、重商主義者にたいする自分の優越性を堂々と確信しているのは、なんと云えばいいのであろうか？⁹⁾

ここでもまた問いの取り違えが存在している。

つまり、リカードウ学派は「利潤の原因とは何か」という問いと「利潤の大きさを決める原因は何か」という問いを取り違えている。言い換えれば、「利潤（剰余価値）の大きさはどう決まるか」という問いに固執して、「利潤（剰余価値）の原因とは何か」という科学的な問いが没却されている。独自の方法をもった経済学批判の部分がフランス語版に採り入れられたために、第5篇のタイトルに「さらに進んだ研究」という文言が入り込んだといえよう。

第3章 第5篇における経済学批判のあり方

しかし第5篇でマルクスが古典派経済学の問の取り違えを批判したといっても、その独自の批判の仕方は、第5篇（第5章）には当初から存在していたともいえる。そういういった取り違えを批判するやり方は初版『資本論』から存在した。マルクスが『資本論』で行っている経済学批判は多数あるが、しかし第5篇に限って言えば、その批判の方法は独特である。つまり古典派が問いの取り違えをしたという点をとらえて批判を行うという方法は独特である。たとえば次のような批判をマルクス初版『資本論』の第5章の脚注15で行っている。

リカードウやその他の人々が、この上なく歴然とした事実（労働日の過酷なまでの延長）を目前とみていながら労働日が不変の大きさをもっているという自分たちの学派の見解に独断的に執着して、この見解をじっさいに自分たちのあらゆる研究の基礎としたのに対して、マルサスが、彼のパンフレットの他の箇所でも直接に表明されている労働日の延長を強調している点は、マルサスにとって全く名誉なことである¹⁰⁾

上に述べられているように、リカードウらは労働日が一定という仮定をたて、利潤の大きさがどのように決定されるかという研究に没頭した。

ところがその時代はマルサスが指摘したように、労働日延長や労働強度の激しい時代だったのである。つまり、リカードウは、労働日延長という事実を目の当たりにしながら、労賃と利潤の関係、つまり労賃が上昇すると利潤はどのように変化するかという問題設定にこだわり続けたのである。言い換えれば、その問題設定を持っていることによって、労働日の延長という事実を無視あるいは見過ごしたのである。

問いの取り違えを指摘して古典派経済学を批判するというやり方は労賃論ではじめて生じたわけではなく、初版『資本論』の第5章ですでに存在していたのだ。したがって第2版や初

9) MEGA II / 7, S.446ff.いうまでもなく、このテキスト部分では、リカードウおよびリカードウ学派のことが問題となっているのであり、ミルに関する叙述は付け足しにすぎない。

10) MEGA II / 5, S.428.

版『資本論』で問いの取り違えをおこなっていたとする古典派への批判は、初版第5章の時点ですでに存在していたと言えよう。

終わりに

マルクスが初版『資本論』から第二版『資本論』においてタイトルの変更を行った理由は次のようなものである。それは「労働の価値・価格とは何か」という間違った問いへ執着して科学的な問いをないがしろにした古典派経済学への批判が、労賃篇の離脱とともに失われたからである。また第二版『資本論』からフランス語版『資本論』にかけてタイトルが変更された理由は、リカードウが「剰余価値の原因とは何か」という問いを立てずに「利潤の大きさはいかにかに決まるか」という問いに執着した点が付け加えられたためである。よって『資本論』第5篇の主要な内容が経済学批判にあるということが結論として言いうるであろう。

参考文献

- Althusser, Louis Pierre [1965] *LIRE LE CAPITAL*, 権寧・神戸仁彦訳 [1974] 『資本論を読む』 合同出版。
宇野弘蔵 [1964] 『経済原論』 岩波書店。
宇野弘蔵編 [1967] 『資本論研究』 第2巻, 筑摩書房。
宇野弘蔵 [1973] 『経済原論』 『宇野弘蔵著作集 第2巻』 岩波書店。
Marx-Engels-Werke Vol.33.
大谷禎之介 [2001] 『図解 社会経済学』 桜井書店。
大村泉 [1998] 『新MEGAと《資本論》の成立』 八朔社。
大村泉 [1999] 「剰余価値=剰余労働把握におけるマルクス経済学の独自性—『資本論』第1部第5篇の標題変更—」 『研究年報経済学』 Vol.55, No.4。
小幡道昭 [2009] 『経済原論 基礎と演習』 東京大学出版会。
金子ハルオ [1979] 『資本主義の原理と歴史』 青木書店。
金子ハルオ編 [1997] 『資本主義の原理と歴史』 青木書店。
金子ハルオ [1968] 『経済学 上』 新日本出版社。
横山正彦・金子ハルオ [1987] 『新版 マルクス経済学を学ぶ』 有斐閣。
齊藤彰一 [1999] 「剰余価値の原因への問い—『資本論』第1巻第5篇をめぐる諸問題について—」 『アルテス リベラレス』 第64号。
齊藤彰一 [2012] 『マルクス剰余価値論の地層』 八朔社。
齊藤彰一 [2021] 「翻訳：マルクス・エンゲルス新全集第二部第8巻序文」 『アルテス リベラレス』 第108号。
さくら原論研究会編 [2019] 『これからの経済原論』 ぱる出版。
富塚良三・服部文男・本間要一郎編 [1985] 『資本論体系第3巻』 有斐閣。
鳥居伸好 [2017] 「絶対的および相対的剰余価値の生産」 『経済』 2017年6月号。
鳥居伸好 [2020] 『なるほどマル経 時の流れを読む経済学』 桜井書店。
林直道 [1975] 『フランス語版資本論の研究』 大月書店。
MEGA II / 5 [1983] DIETZ VERLAG BERLIN。
MEGA II / 6 [1987] DIETZ VERLAG BERLIN。
MEGA II / 7 [1989] DIETZ VERLAG BERLIN。
MEGA II / 8 [1989] DIETZ VERLAG BERLIN。
森田成也 [2019] 『新編 マルクス経済学再入門 上巻』 社会評論社。
ローゼンベルグ, デ・イ [1962] 『資本論註解』 第二巻, 梅村二郎訳, 魚住書店。

(2022年4月12日受理)